

生れない以前

僕は生れない以前、已に寂寞の意識の何物たるかを知つた。このライフでまづ第一に僕が學んだことは涙であつた。如何に痛ましく寂寞が僕を嚙んだであらうよ。僕は獨り樹木の暗黒と涙の影との間を歩いた。月が輝き風が吹く、僕は方角を間違へて自分の涙を浪費したと感じた。詩に向つたことが僕に對する避くべからざる行動であつた。それを誰も疑ふことが出来まい。僕は獨り雲の指の招くままに歩いて居る僕は夢とライフとの問ふる寂しい路をただ獨りセレネードして歩いて居る。

第二十八

僕の愛人

僕の愛人は花の間に青く輝く小河に住んで居る。彼女の花の離れ家は暗黒のなか震へ、登り又浮いて居る。

僕の愛人は、燕が少女の心から盗んだ香料と祕密を地上の鬱金香に與へて仕舞ふところを歩いて居る。彼女の蜿る歩みは大地の靈を苦痛に叫ばしめる。

僕の愛人は虹で橋かけられて居る星の間で歌つて居る。彼女の歌は星と地下の谷ミを橋付けて居る。

第二十九

追想の鳥

僕の追想の鳥は夜の音律につれて、前へ進み、後へすすり、柔かにも悲しくも、寂しく飛び廻る。

何時まで僕は假面をかぶつた沈黙で愚弄されねばならぬか。單調の幽霊

——灰色の沈黙よ、僕から去つてくれよ。

月が出たのではないか。僕は落つる木の葉に急激な大地の痛みを聞いた

私の言葉

第一

人が自分を盛んに主張して他人にまで自分の意見を強ひる時に限つて、其人が意見を餘り多く持たぬ時であり、又其意見が薄弱な場合であるのを私は發見します。實際、意見があり其意見が強く充實して居る場合の多くでは、其人は毳カサに一杯満ちた栗の様に、靜かに満足して無言で居るでせう。無暗に音を立てるのは空車であります。春夏秋冬は無言で循環して毫も其跡を残さぬ、又蒼蒼たる天は常に無言の状態を維持して居ます。

第二

一斤の茶も太陽に曝されると變色するのです、又一挺の墨、一瓶のインキも等しくその尊む可き分質を失ひます。それは孤獨 (Solitude) の保護から遠ざかり或は孤獨から裏切つた罪だ。私は思ひます。我我文學者は孤獨のブレッシングの下で存在し成長したいと思ひます、孤獨に終始し生死を共にしたいと思ひます、私は孤獨の美であり花である沈黙の歌者でありたいと祈ります。

第三

眞實なる美を見、愛しようとするならば、醜の苦痛を通つて初めてこれを見或は愛することが出来る。それが最も誠の方法であり最も勇敢なる方法であると思ひます。世界と人生をその儘で見たり愛するのは平俗である。私は人生や世界をその儘で無く見たいと思ふ、出来るだけ大なる嫌惡の情でこれを惡みたいと思ひます、而して後初めて見た世界や人生こそ自然であり眞實であるだらうと思ひます。私は語を作つて云ひます、『倒れるのはやがては起るを意味し、倒れる其事が則ち起るの始めである。』

第四

私嘗ては私の一大仇敵は疑であると思つたことがあつた、然し今では、眞實に疑ふといふことは時には眞實に信することを意味すると思ふことがあります。(さうなると以前の敵は今日の友であります。)又私は疑念は信仰其物よりは、遙かに人情的であり又より多く生きて居ると云ひたいと思ひます。實は苦痛は喜悅より更に實際であり遙に眞實であります。人或は一種のバラドックスといふかも知れぬが、私は「疑の裡に信じ、信仰の裡に疑へ」と云はうと思ひます。

第五

私の生れた時どんな有様であつたかを私は知らぬけれども、私は私の妹の生れた時の極めて朧けな記憶を持つて居ります。何でもそれは夏の晩で、紫色の空には星が一杯あつたと覺えて居ります。夏のことであつたから部屋の内には張つた蚊帳が風で揺れて居ましたし、又座敷の軒端に岐阜提燈が吊るしてあつた様に記憶して居ますから、盆の前後であつたでせう。何時其晩私は眠つて仕舞つたかは知りませんが、提燈の火が消えたと同時にあつたとも覺えて居ます。私は急に眞夜中赤ん坊の泣く聲で驚かされて目覺めました、私はその聲で自分の已に兄と成つたのを知つたのです。私は私の妹の最初の泣き聲が(苦痛からか

或は喜悅からの泣き聲であつたか誰も知りません(三十一年後の今日でも、私の耳の何處かに残つて居るのを感じます。如何にして赤ん坊が生れるかを知る必要はありません、彼の泣き聲が彼の存在でありま
す。泣き聲——これで十分です。私の妹の泣き聲、最初の極めて鮮か
な泣き聲！ 私は私の存在を證明する爲め私の眞實なる泣き聲を持ち
たいです。其聲は私が母の胎内を飛び出た時最初に發した泣き聲の様
に極めて清く鮮かな泣き聲でありたいのです。

第六

随分世の中には議論が多いですが、私は人が咲く花、落つる花、來たる
雲、去る雲を見て議論することの少いのを思ひます。人は其等の問題
で餘り強く賛成したり、否定したりするのを聞きません。

第七

私幼少の頃は他の少年と同様、義朝の九男牛若丸の敬慕者で、夕日が西山に傾く頃に成ると、遙かに思を鞍馬山の奥、四邊物淋しく松の風梢を拂つて時ならぬ雪降り哀猿雲に叫ぶ間で、頭に大兜巾を戴き山伏姿に羽團扇を携へた鼻の高い大天狗に兵法の奥儀を授かつて居る源氏の公達を想像したものでした。私の郷里から西に去る三里の場所に、多度山といふ小高い山があつて、私は屢々其山へ登つたころがあつたのですが、天狗らしい老人が其山の頂上近くにある一軒家で火を焚いて居たのを見たこと云つた一友人の言葉を信じて、ある年の登山では、連れのものに離れて唯一人、あちらこちらと淋しい樹の下や、岩の間を

徘徊いて、鼻の高い羽團扇持つた大天狗に出會つて天下の兵法を教へて貰ひたいと願つたことがありました。また私の郷里は其地方で有名な午頭天王を祭つた神社の所在地で、神社の地内は樹木茂つて晝尙ほ暗き有様です。夜になると天狗共が高い松の木の枝に火を點するかも知れぬと空想を抱いて、そつと家を抜け出して獨り神社の地内を彷徨したこともありました。私の少年時代はかかる放恣な想像に捕はれて居たのでした。或日私は父に何かの理由で痛く小言を云はれたのが癢に障つたので、家をぶりぶり怒つて飛び出して『もう歸つて來ませぬ』と捨て臺詞を残しました。時は丁度夕景で多度山は夕日で眞赤に燃えて私の小説的な空想を煽り立てて、其時は私の耳はありありと天狗の言葉さへ聞えたやうに感じたのです。私が飛び出して向ふ先きは必ずや私に兵法を教へるだらうと思つた大天狗の棲家ある多度山でした。

驚いた私の母は私に十町ばかり離れた天王川の土手の上で私に追ひ付
きまして、無理槍私の腕を握つて家へ引摺つて行きました。嗚呼私は
天狗に出會し得る最後の機會を逸し去りました。其後高等小學に入つ
て英語を習ふやうになつてからは、段段私の天狗熱も冷却し行つたの
ですが、今日三十年後の今日でも、少年時代の空想に立ち歸ることが
あります。若し其時私の母が私を連れかへらず、私が首尾能く多度山
の天狗に弟子入りしたらばと思ふことがあります、私は人生の祕密を
教へるから来いといふ柔い聲を何處にも知れぬ遠方の山から聞くやう
な感じがすることがあります。然し四十に近い今日ではとても兜巾
姿の天狗に出會ふ機會はありませんまい。若し出會ふこと出来るとし
たらば、これは少年だけ持つて居る想像の特權の力で出来るのです。今
では其特權を失つて居ります。

第八

西洋諸國では玉子の料理法に三百六十五の異つた方法があるといふけれ
ども、『エス』と『ノー』の語り方は唯一つあるのみだ。我我日本人には
御辭儀の仕方が百あつても、坐る目的は身體の安靜を得る一つあるの
み。

第九

知識ウイズドムの心は常に悲哀であり又苦痛である。知識が學校の講堂から這ひ出した著録頭巾を冠つた老教授（チエスタートオンであつたか近代の淺薄な學者をペンギン・プロフェサーと冷笑しました）であると思つたら非常な誤謬です。知識は有らゆる所罰を拂ひ終つて改正した犯人です、惡か懺悔かが聖人と變じたのです。

第十

我々近代人は、祖先より遙かに利口に成つたから常に不安であり性急であると思つては實際ではありません。然し乍ら私は信じて居る、此人生の盡きざる變化の實現、又佛説に依ると輪廻、死しては生れ生れては死する状態の可能が、私をして荒野に呼ぶ一種の風の如く感ぜしめます。

第十一

太陽の下では新らしき物無しといふ西洋の句があります。無い？ 大いにあります、先づ以て如何に鳥が飛び、花が笑ふかを見給へ。新らし
いぢやありませんか。

第十二

近頃銀座邊の某西洋料理屋へ行くとボストン・ビーンズ(煮豆の一種)の
看板のあるを見ました、又文藝的閑話チツルタツルも米國の安値な雑誌から輸入さ
れました、然し此處に日本と米國との相違があるのは、米國にはポー
とウキトマンがあるが日本には無い點です。

第十三

私は自然の現象の中で、月位個人的接觸を嫌ひ偶然の握手さへも肯せぬと思はれるものは他に無いと思ひます。如何にも月は悠然として世界の粗俗野鄙から遠ざからんとして居ると思はれます。花を見給へ、佛壇を飾る清淨な蓮の花でも、人情的で友情の交換を希望する様に見えるぢやありませんか。然るに月は他から逃避せんとする有様は如何にも巧妙で、鋭い婦人的知覺さへも持つて居ると云へます。月が樹木の挨拶にも答へずして高くさつさと上つて行く狀を御覽なさい、山でも丘でも月を捕へる力を持ちません。雲は常に月の巧な遁逃の爲めに瞞されて居ます。私は夕景獨り野原や林間を散歩し乍ら月と迷藏を遊ぶ

ここにあります。私は月が後に居るだらうと思ふと月は私を前から驚かしますし、樹木の間にも月を求めて居りますと、月は私の足下を流れる水の泡の間から笑つて居るのです。私は私が避けたいと思ひながら避け得られずして居る苦痛から免れる祕密を月から學びたいと思ひます。實に月は不思議な人格を持つて居る、月位自分自身の路を唯一人自由勝手に始末して行くものは自然の現象中類が無いと思ふのです。

第十四

私がある西洋料理屋で一杯の珈琲を飲んで居るに、隣りの椅子に坐つて居た一青年が友人に、「君は條りに議論があり過ぎる」と呼ぶのを聞きました。實際日本も今日では Reasoning too much の文明の程度に達したのですか知らん。四十年前我我日本人は野蠻人と稱せられて居たです。然るに僅々四十年で、はや我我は「議論があり過ぎる」てふ文明國人に成つたのです。我我は所謂智識の重荷で不愉快極るのです、賢愚の問題は別として、我我今日では近世文明の墮落を分擔して、遂に尊む可き人格を失つた譯なのです。四十年前の野蠻時代がひたすら捕申敷く思はれます。

第十五

其方法は問題で無くて、如何に目的を達するかが主要の點である。船頭多くて船山に登るといふ諺があるが、今日の藝術を墮落せしめたのはその數多い船頭の爲めなのです。此貧弱な時代で我我の財産を物質上増加せしめたものには、果して何でせう、私は唯一着のフロツク・コートミ倫敦あたりでは舊式で冠られ無い安價の高帽子一箇あるのみと云ひます。

第十六

一日私ウオター・サベージ、ランドア(英國の詩人)の傳記を読んで居まして、*"I by the grace of god am Walter Savage Landor"*の句を発見して大に痛快に感じました。私も『神の恵みに依つて余はヨネ、ノグチなり』と呼ぶ機会を得たいと思ひます。

102

第十七

世の中で幾人の人が、鳥が鳴く時已に朝だといふことを知つて居ませうか。

103

第十八

粹や額縁を作るのは造作無いが、問題は其中に入れる畫其自身です。日本政府は立憲政體といふ額縁だけやつと作り上げたが、中に入れる畫のこみを忘れて居たのです。今額縁は出来上つたが、もう日は暮れさうで畫など描いて居るには早や暗いのです。

第十九

私を隠し得るだけ深い山は何處にあるか。私を呑み得るだけ大きな川は何處にあるか。さういふのは私が必ずしも大なるからでは無く、唯私は私であるからです、又さう云つても私は世に所謂個人主義者云はれる連中の一人ではありません。

第二十

私は近頃になつてやつと安眠の甘さを知りました。 Good-nightといふ言葉位嬉しいものは有りません。

第二十一

私は私と同年輩の友人に遇ふに常に云ひます、「お互にかうなつては、急に死ねぬね、どうしても七十位まで、いや八十でも九十でも長命しなくてはならぬ。」僕は二十三か多くて二十五位までより生きてたく無いなどと、天才を氣取つたのはつい昨日の事と思つて居たのに早や四十五です。然し實際人生の美を味ひ感ずるのはこれからでせう、如何に太陽は照り、如何に花は咲き、如何に川は流れ、如何に鳥は飛び、如何に草は青いか——これ等の美を見る眼がやつと近頃開けて來たやうに思はれるのです。

第二十二

英語文學の最上なるものは讀む爲めであるとしたならば、私は支那の最上文學は眼で見て楽しむ爲めに作られて居ると云ひたいです。而して私のこれから書きたいと思ふ自分の詩は、讀む爲めより又見る爲めより、寧ろ香氣を嗅ぐ爲めのものであつてほしいと思ふのです。

第二十三

私が詩人と呼ばれ得るならば、それは詩を日常生活に運び入れたいといふ意義からであつてほしいと思ひます。私が最も詩的である時は、私の詩が裏切りせぬ場合なのです。私が最も習俗的である時は、私が最もエクセントリックである、則ち最も眞實である場合なのです。

第二十四

自分の激怒を顯はすには、此處に沈黙サイレンスの言語が有ります、沈黙の言語は敵を粉碎するには最も強いものです。沈黙の裡で（私が最も強く完全である時始めて沈黙の言語を使ひ得るのです）私は所謂文藝復興レナサンスそれ自身であり得るのです、自然に特種の調と色合カラーの創作し得て一種 Beauty of Nuance たり得るです。

第二十五

中古代の日本人は、霜の様な冷たい刀で切腹する場合でも、或は茶の湯で茶碗を掌上で廻して居る場合でも、同じ態度であつたのを私は感服します。彼等の態度は常に平靜で決して急激なもので無かつた。又如何に彼等は争鬭と多言を嫌つたでせう。争ふことがある場合では刀で其結論を定めさせましたし、語る場合では沈黙の言語を使用したのです。彼等は人生の目的の周圍を、實際の藝術家の如く、靜かに注意深く動いて居るのですけれど、決して其周圍から離れません。彼等は習俗慣例に忠實であればこそ彼等はエクセントリシティーたるこゝが出來、彼等はエクセンリトックであるから常に習俗的であり得るのです。

如何に時代は我我を變化せしめましたか、我我の用ゐる言語は多辯であり、一問題がもち上りますご何故我我は喃喃の言葉で賛成したり否定するでせうか。我我の態度は恰も素人俳優の如く、舞臺へ上つたは上つたが、語る言葉を離れてどきまぎして居る様なものです。如何にも恥づかしい次第です。

第二十六

私が近代的に見ますならば、それは私が人情的であるごいふ意義からで無くてはなりません。私が歌ふ詩が不分明であるのは、畢竟私の心が一杯である理由からであるのです。

第二十七

私が來てもよろしいと告げるまで、私の側に君の來るのを拒絶したいです。私は光線の工合なども考へて日の幾時といふことまで確かにしてからで無くてはならぬのです。古美術品か何かの様に自分のプレゼンテーションに拂ふ注意の餘り大なるを人が笑ふとしても、私は勿論自分を美術品と考へて居るに答へる外何等の返答を持ちません。夜の鐘が鳴りはじめると、私は私の有らゆる精神上の遠慮を切つて落して香でも焚きませう。私のエゴは自然に私の生命のページの上に適當な力説を與へるのを希望します。斯かる時こそ私が、私の友人に來れよと通知を發する時なのです。私が私に拂ふ尊敬は私の藝術と歌とに拂

ふ尊敬で、私は人に接するに當つて私のベストを示したいと思ふのです。若し私の友人が如何にして來るか知らぬならば、私は直に云ひます、曰く冷かなる微風に乗じて月の柔かなる影を踏んで來給へと。

第二十八

或人は私に向つて曰く、君は極點まで日本人で、しかも極點まで英國人だ。私は其人に私をよく見てくれたと感謝しました。極點まで日本人なればこそ私は情熱に動かされ、又英國人である力で私は私の藝術を現實化することが出来ると信じて居る。然し内心私の英國人であることを悲しむ時があるのです。私は眼前大なり得る路を見乍らこれに達することが出来ぬのは、英國式常識が私を邪魔するからでせう。

第二十九

私は眞實なる精神上の亡命者といふ感慨太だ深いことがあります、それは私が友人を持たぬ理由からで無く、私が全く屬す可き遺傳と事情とを失つたからです。私は數箇の月が一時に照りかがやく世界から朗かに來る聲を耳には聞きますけれども、之に達する路を見ることが出来ません。

第三十

世には段々肥満して詩人たり得ずなつた男がある。私が云ひますと、友人は成程肥満した詩人は無い、又美術家も無いと感服しました。毎年英國で開催せられる所謂アカデミー展覧會なるものの目錄を開け給へ、私は其畫の工合を見て、其の作家の肥満して居るか又は瘦せて居るかを語ることが出来ると斷言します。アカデミシアンの大部分は肥つて居るに相違ありません。

第三十一

日本などに住ひして、眺めるに菊なり櫻樹なり、飲むには茶、外國から來る雜誌上のまづい詩などを讀んで居るに、まるで十八世紀の生活状態です。日本に居て長命せぬならそれこそ奇蹟云はねばなりません。

第三十二

西洋人は古代の日本を解釋するのに單純の二字を以てしようとしています、然しそんな無鐵砲はまたごありますまい。舊日本は如何に情と力を一定の場所に集中するかを良く了解して居て、時代の精神に色彩を適當に付け得たものです。然るに今日の日本は段段非日本に成つて行くと私は云はうとするのであるが、それを私を自由自由と云ひ乍ら實際自由を嫌惡する點から説明したいと思ひます。今日の日本人は知識を得ようと努力する如く見えるのは、畢竟彼等が臆病であるからです。

第三十三

不思議です、人が私を愉快な男と思ふ時に限つて、實際私自身自分がいやでく仕方の無い悲觀の場合であるのです。人の心なんて分るものぢやありません、又人は一種の俳優ですからね。ペンを見るに必ずしも書くものと思ふに間違ひです。

第三十四

もう一章最後に英文で書かして貰ひませう。日本文より確に英文の方が上出来だらうと人に見せびらかしたい爲めぢやなくて、時には英文の方が的確に私の意味を傳へると思ふからです。

While I admire your brains, let me say that you are a little crude and flat; isn't there any way for you to forget your reaching the same conclusions ? Although I may appear to you alien, exotic, subtle, mysterious, often baffling, I do not mean to become different from you ; and I always deny when people say that my being here is rather a sacrifice and incongruity. My thought is only to become like myself; if there is anything it might be that I hope to grow plainer. Do you call that eccentricity?

第一則

西洋では「詩人は別人種だ」と云はれて居る。シエレーやバイロンと同時代に同じ場所に住んで居た靴屋の亭主や「腰辨」に比較したならば彼等は確に別人種と思はれたであらう。してこの「詩人は別人種だ」といふ言葉は日本でも肯定せられるべきものだらうか？芭蕉や西行を隣りの百姓や裏の坊主と比較するに、シエレーやバイロンが同時代の澤山の人間と違つて居た程度に等しく別人種であるといふことが出来たらうか。日本では詩人（歌人俳句師皆この二字で蔽つて居るとして）は別人種でなく、君や僕と同一階級の人間であるといふ所に「詩人論」の焦點

を置かねばならぬと思ふ。西洋では詩人は不死の光明を放射してインモ
タリチーを要求するものとしてあるが、日本では詩人の存在を丁度花や
鳥の存在に一樣に自然の現象に取扱ふ點に眞實の意味があるとして居
る。詩人を普通の人間と神との中間に立つ特別な人間と見て、神性の所
有者が坐る一段と高い床の間に祭りこむのは希臘思想である。これは希
臘だけに限つた思想で無く、昔の「歌聖」を神様に崇めこんだ日本にも
流れて居る。が、希臘人のやうに詩人を巍巍たる莊嚴の表象として取扱
はない、昔の詩人（此處では「歌人」を意味して居るが）文字の上で驚
くべきことを演じた場合には我我は天地自然を感動せしめるに足る彼等
の人情美を讚美するのである。古今集の序文のなかに木に飛ぶ鳥水に住
む蛙も歌をうたひ、ポエトリーは天地と共に生れたものだと言じて居る
が、これは人類を鳥や蛙にまで引おろしたので無く、鳥や蛙も之の存は

在の眞意味を表現して宇宙の共和的大音楽に参加する有力な部員として
見たのである、鳥や蛙とも共通する自然から等しく生れた詩人は其他百
萬の現象——山にせよ川にせよ森にせよ又蟲にせよ鳥にせよ——と異つ
て居る筈が無い。有らゆる宇宙の表現は皆驚くべく又聖神なものであ
る。驚くべき神聖なる表現は「自然美の發露」したものの外で無い。し
て人間はこの自然美の發露を人情から力説するのが其他の自然の現象か
ら異つて居るだけである。

西洋では盛んにインスピレーションといふ言葉を使ふ。之れを偉大な
偶然の拾物乃至發見でもするやうに詩人が得ようとする目的(?)とし
て居る。西洋の詩人はインスピレーションといふ目的だけに兩眼を据ゑ
てこれに達する道程は論じない。我我日本の詩人はインスピレーション
を固定した目的物として取扱はない、そんな目的物はどうでもよい、我

私の尊重する所はこれに達する道程にある——云ひ替へると、自然の音律に乗つてどうして『詩の道』を歩くかにある。再び云ふがインスピレーションなる言葉は少くも我我には不必要である、我我の詩はこんな目的物に是非共到着しようとする努力で無い。無理にインスピレーションの言葉を使ふとすると、我我は之れを單に『どうして自然の音律に觸れるか』として了解したいと思ふ。そして我我は之の一語を生きた有機體的のものとする事が出来ると思ふ。西洋人はよく『詩的眞理』の言葉も使用する。この詩的眞理なるものは科學者でも又考古學者でも研究することが出来る程度のものであるか、我我はこんなものに頭腦を煩はすもので無い、我我は唯人間の本能性(之れは五あるか六あるか知らぬが)の充實と健在な發達を謀らうとするだけである。『天地と共に生れたボエトリー』を信じて、本性の自然の發露を期するのみである。故に日本で

『詩人は別人種』でなく日本人擧げて皆な詩人たる事が出来る素質を具備して居る。この點が西洋と異つた所である。

ウキトマンは風の聲や波濤の音を研究して原始的な人間の言葉が音律的であるやうに自分の詩を書いたと云はれて居る。彼は西洋の詩人中で一番確に『天地と共に生れたボエトリー』を理解した男である。彼は我我同様に、決してインスピレーションを目的として努力した詩人で無く、一意専念、自分の歩く『詩の道程』を美に高尚に眞實にならしめたいと希望したものに過ぎぬ。彼の詩集を翻すと、彼の詩は目的を書いたもので無く目的に達する道程の記録であるのを知ることが出来る。——これ故彼の詩は皆生きて居る動いて居る有機體的生産力に富んで居る。闇雲當てにならぬインスピレーションを盲探する無智な冒險談でなく、彼の詩は正直な純な裝飾のない日常生活の記録である感想である祈禱で

ある。ウキトマンばかりで無く日本の芭蕉の俳句もさうであつた又西行の歌もさうであつた彼等の詩が偶然らしく見えて偶然の産物で無いのは、彼等が平凡な詩人のやうにインスピレーションに捕はれず、實際これを否定して掛つた健實な態度に生きたからである。我我もインスピレーションの言葉を忘れるのを第一義とせねばならぬ。平靜な正直な詩界の住者は無責任な冒険者でない。我我は空中の飛行家で無く確實な地上の歩行者であつてほしい。

第二則

私の親愛なる友印度のサロジニ・ナイヅウの句に「And all our Mortal moments are a session of thinfinitie」云ある。「Session」は「開會」「開廷」の意味で、我我の人間的瞬間を「無終」が開會して時間的現實を示した姿と見たたのである。無終を瞬間が積み重なつた累計と思ふのは、眞實で無い。之れは血迷つた理解力の自由に外ならぬ。幾何學上のゼロと等しく何程集つてもこの實に變化はするがこの量を増さぬ瞬間は無終と同體と見ねばならぬ。動いて瞬間と現し靜まつて無終の姿と成るので、瞬間の裡に無終を感じ又無終のうちに瞬間の動的意義を知るのが眞實なる

藝術（これは繪畫にせよ又文學にせよ）の『祕密』である、決してこれ以外に藝術の祕密は無い。如何にして其祕密をエフェクティブに表現するかが藝術家のたつた一つの目的である。無終を暗示する瞬間は偶然である、偶然なればこそ其處に生命がある活動がある、して又瞬間は無終の一表現に外ならぬ故に絶對的である、絶對的なればこそ其處に力がある靜止がある眞理がある。眞藝術は偶然的であると同時に絶對的な意義を抱合せねばならぬ。大自然は如何なる場合でも（川を見よ山を見よ樹木を見よ笑ふ園庭の草花を見よ又空中に流れる斷雲を見よ或は道無き暗夜を走る孤獨の月を見よ）偶然的と絶對的の兩意義を同時に表現して、我我をして『眞の偶然的』は『眞の絶對的』と同じ意味であると思はせずには止まぬのである。私は偶然的でしかも同時に絶對的な藝術（文學にせよ又繪畫にせよ）を見たい。私はこの實例を過去に於ては、乾山の茶

椀に光琳の屏風に雪舟の山川に又芭蕉の俳句に見て居る。眞實なる藝術は取扱ふ題材の問題で無い。繪畫だけに限つていふと一本の杉の木一苗の草花で澤山である。又言葉の上の詩だけに限つていふと月を歌ひ愛戀を語る數語で澤山である。

第三則

西洋の詩人は情熱の創造者たりたい、又人生の改造者たりたいといふ希望が高潮する場合には、彼等は決して混亂紛雜の境地に飛込むのを恐れるもので無い。其處に彼等の弱點と長所が互に抱合して居る。今日日本の詩人を見ると、彼等が一番開拓したいと希望するのは清淨明亮な境地で、其處に住んで自分自身を整理したいのである。日本古來からの歌人乃至は俳人の重なる人や所謂茶人の頭抜けた連中はみな前記の希望を幾部分でも成功し得たものと云へる。彼等は西洋人と異つて混亂紛雜の境地に縮込むのを非常に嫌つたものである。従つて彼等は「情熱の創造者」

たらんとする努力を持つて居らぬので、清淨明亮な境地を亂さない範圍で「情熱の妥協」を認めたものである。古來からの歌人がうたつた情熱に創造的な力が無いのがその爲めである。又彼等は西洋の詩人のやうに「人生の改造者」たらんとする主張の上にとつたもので無く「人生の肯定」を重要視したのである。故に彼等は社會上では従順な人間である。彼等は多くの場合に於て「詩」を單に藝術として研究して居らずに、完全な人生を發達させる上に必要條件として詩の前に膝まづいて居る。

西洋の詩人はいつも大きな危険に出遇つて居た。その危険は彼等の手にかかると藝術が理智化するのをいふのである。實際彼等は最初理智の適當な制限を希望したものだ、仕舞には理智に捕はれてその命令に服従するに至る悲劇を演じないものは少いのである。して日本の詩人にも危険は有る。その危険といふのは、日本詩人は時とすると眞實な藝術だ

5. Mar
1922
M.S.

と思ひ乍ら握つた所がそれは道德であつたといふのを意味する。詩人に對して道德位危險性を帯びて居るものは無い。日本の歌人乃至俳人などは情熱の上に於ていつも失敗せずに、道德の手に捕へられて身を亡ぼすに至つて居る例は澤山ある。實際この道德の藝術に對する危險は理智の危險以上でないかも知れぬが必ずしもその以下で無い。西洋の詩人が理智の奴隷となるとアポロの着物の髣髴にも詩論を發見しようとし、空を飛ぶ一片の雲にも形式的な解剖を強ひるに至るのである。彼等が持つて居る詩論や形式論は中中方強いものだが、時には眞實の藝術を氷結せしめる、純な感情を畏縮せしめて雜然たる官能ばかりを混亂ならしめる結果になる。勿論彼等にエビツクやドラマやプレーが發達したのも元來は彼等が持つて居るフォームの完全な活動に原因して居るのはいふまでも無い。

して日本の詩人は眞實な詩と同化するには概一にフォームを忘れねばならぬと思つた。この觀念は十中八九の場合には正常であつたが、彼等は藝術を離れて藝術へ入る希望を持ち乍ら、時には離れるべき藝術を持たぬ又時には藝術を離れて非藝術に入る結果になつて居る。

日本の詩人に西洋の詩人のやうにもつと熱と理智があつても差支は無い。又其等を適當に使用するだけの努力があるのを希望するものであると同時に、西洋の詩人は情熱と理智を忘れて藝術の異つた生命に入るのを僕は希望して止まぬものである。

勿論西洋の詩人が詩の『進行』^{Progress}に興味を持つて居るのは彼等の情熱と理智の働きに相違ないが、日本の詩人のやうに單刀直入に歸結を掴むには情熱と理智が害をする。それと反對に日本の詩人の作品には『結果の報告』はあるがどうしてさうなるに至つたの『進行』の説明はまるで無

い場合が多い。それは例を擧げるまでも無いことである。

よく西洋の詩論には「詩狂」とか「風狂」とかの文字が使用されて居る。我我日本の詩人の心理状態を「狂」の一字で解釋したい場合もあるが、我我は「狂」の動きを重要視せずに「狂」の静かさを尊重せねばならぬ。則ち「狂」が普通の状態に歸つた場合に日本の詩人に眞實の詩があるのである。有らゆる現象の「動」を見ずに「静」の方面を見ようとするのが我我の詩である。が、今我我の詩に意味のある變化を來たせねばならぬと思ふ、してそれは我我が動の生命を情熱と理智の上に開かして初めて得ることが出来る變化であらうと信じて居る。それは決して西洋の詩に妥協するの無。

著者 野口米次郎

大正十年十二月十五日印刷
大正十年十二月十七日發行

二重國籍者の詩
定價貳圓五拾錢

著者 野口米次郎
發行者 長谷川巳之吉
發行所 立文社詩歌部

工6961

野口米次郎英語著書目錄

- Seen and Unseen, 1897 and 1920.
- The Voice of the Valley, 1898.
- The American Diary of a Japanese Girl, 1902, 1903, 1904 and 1913.
- From the Eastern Sea, 1902, 1903, 1904 and 1910.
- The Summer Clouds, 1906.
- Ten Kyogens, 1907.
- The Pilgrimage, 1909 and 1912.
- Lafcadio Hearn in Japan, 1911, 1912 and 1919.
- Through the Torii, 1914 and 1921.
- The Spirit of Japanese Poetry, 1914.
- The Spirit of Japanese Art, 1915.
- The Story of Yone Noguchi, 1915.
- Japanese Hokkus, 1920.
- Hiroshige, 1921.
- Japan and America, 1921.

日本語著書目錄

- 歸朝の記 千九百三年。
- 英米の十三年 千九百四年。
- 朝顔嬢の米國日記 千九百五年。
- 日本詩歌論 千九百十五年。
- 歐州文壇印象記 千九百十六年。
- 六大浮世繪師 千九百十八年。
- 日本の美術 千九百十九年。

終